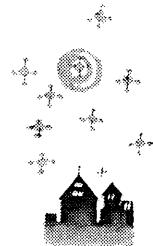


ヨーロッパの旅(六)



平井信義

パリは、私にとってまことに気安い都会である。西ドイツに留学していた頃、気づまりを感じると、パリへにかけていったものである。

十五年前のことであるが、当時の西ドイツには、黄色人種や黒人の滞在者が非常に少なかった。私なども、フランクフルトやケルンに住んでいて、珍しい存在であったから、実にじろじろと見られたものである。市電に乗っていて、両親と子どもの三人から、穴のあくほど見つめられたことがある。何か口のまわりにでもついているのではないかとハンカチで拭てみたり、帽子をかぶりかえたりしたが、それでもじっと見つめているのであった。

そのことを友人（日本人）に話した時、彼もまた似たような経

験をしており、彼が歩いているのを追い越してから立ちどまり、まじまじと彼の顔をみるドイツ人もあったという。気持が落ちついている時にはそれも愛嬌というものであるが、いらいらしている時には腹が立つてくる。友人の一人は、遂にたまりかねて、「この野郎！」と叫んだのだそうである。その声をきいて、相手はいっそう目を大きく見開いて彼を見つめたという。

気分がくさくさしてくると、私は西ドイツを抜け出して、パリにいった。そこでは、誰も私を見て振り返るものがない。柔道着を着て歩いても、羽織袴で歩いても、誰も振り返る者はないだろうという話をきかされた。さすがに大都会だと思った。一昨年パリにいった時も、セーヌ河畔を全くの裸足で歩いている男

をみかけたものだ。古本の市をひやかしていたから、学生であろうと思った。そのバリーに比較すると、西ドイツの町々は、全くの田舎であった。

その田舎も、五年前に家内とともに訪れたケルンの町では、和服を家内が着ている時以外は、振り返る人もなくなっていた。和服も、驚歎のまなざしで見ることがうかがえたから、むしろ誇らしくさえ思ったものである。たくさん黒人の留学生などがいて、全く国際的になっていた。すでに、田舎ではなくなっていた。一昨年の時も今回も、いっそうその趣きが強くなっていった。世界は小さくなったという感じで、よく日本人らしい人にも会ったが、別に懐しそうな顔もしなかった。

気安な都会であるバリー——今回の旅も、その楽しみがあった。ロンドンから解放されるのだという気持も、私の心をなごやかにさせたし、知人の夫妻が待っていてくれることも気強かった。

ロンドンを被う雲の上に出た飛行機は、一路バリーに飛び、一時間でオルルー飛行場に着いた。空港のロビーで私の到着を待っていたK君に、私は大きく手を振った。彼も、大きくなった子どもを自分の頭の高さにまでもち上げて、私の到着を喜んでくれた。バリー滞在のスケジュールは彼にまかせてあったから、フラ

ンス語に不自由な私でも、楽しく過ごすことができるだろう。いつ来ても、バリーの気安さを感じながら、言葉に不自由して、折角の楽しみもじゅうぶんに味わうことのできなかつた数々がある。

それについては、五年前に、家内といっしょに来た時の思い出がある。ミラボーにある(バリー西方の十六区)小さなホテルにOさんの紹介で滞在していたのであるが、その二日目の朝、食事をもつてこない。最初の契約では、朝食は部屋に運んでくれることになっていたので、待っていたのであるが、一向に持ってくる気配がない。だんだんと時がたつ。家内は「お腹がすいた」と訴える。もう少し待ってみようなどとだましましたしているのは、実はフランス語がよくできないからである。

遂に、家内が悲鳴をあげて、催促をして欲しいという。「催促っていったって、それがかんとんにフランス語でいえるようなら、とつくに交渉してきたよ」と、僕もふくれもするが、「そうかんとんにいわないでくれよ!」といいながら笑い出してしまふ。

しかし、いよいよ空腹も限界に来たし、予定もある。ぐずぐずとホテルで朝食の出るのを待っているのも馬鹿げたことである。そこで、会話の本を取り出し、「朝食をもつてきていただけませ

んか？」という文章を探してみるが、そのような時に限って、なかなか見つからない。ようやくの思いで似た文章を見つけ、いく度か口の中でいってみる。「これでよし！」と、戸口を出て、階段をおもむろに降りて、事務所にいく。中年の女の人が会計簿に数字を書き並べていた。

「あのう」といいかけると、その女の人は私の顔を見上げる。そして、

「ああ、わかりました」

といって、郵便受けになっている状差しを指さす。

そうではない——という顔つきをして、また「あのう」といいかけると、

「おお、ウィ、ウィ、ウィ」といいながら立って、少し離れたところにある電話器を少しずらして僕の方に示したのである。

「ノン、ノン」といってはみたが、最早長い文章で説明する勇気がくじけてしまった。それならよし、ひと言だ。私は「マンジ

エ（食べるという動詞）」といって、食べる真似をしてみせたのである。その時はじめて大仰なジェスチュアをして「ウィウィ」

といい、ベラベラと何やらいった。何か弁解の言葉をいったのであると推察されるが、本当は何をいったのかわからない。しか

し、どうやら通じたものと思い決めて、私は二階の部屋に戻ってきたのである。すでに汗をかいていた。

家内は、私を待ち構えるようにして、

「なんていいました」ときく、なんていったかわからない——と言えば、いっそうひもじい思いをするであろう。仕方なく、

「今、持ってきてくれるよ」

と答えたものの、あのベラベラといった言葉は何を意味したのか、再び不安になる。「本当に持ってきてくれるだろうか？」その気持を押しかくして、旅行案内に目を通してしていると、一〇分ぐらいしてドアをノックする音。

「どうぞ」というと、年をとったメイドさんが大きなお盆に二人分の朝食をもって登場したのである。私は、英語で、「待っていました」といったのであるが、それは彼女に通じない。きょとんとした目で私を見たが、何か直観したものがあつたのである。私に向けて笑顔をし、ベラベラとフランス語で何やらいった。それはどうでもいい。

「ようやく、ありつけたわね」と家内がいう。

「朝食一つでも、容易じゃないよ。言葉が通じないっていうことは、大変なことなのだよ」と私。

パリーでは、同じようなことが度々あった。食堂に入っても、メニューがわからない。見当をつけて注文をするのであるが、品物が食卓に現われるまでは、何を食わされるかがわからない。殊に、どんな味付けになっているかが一切わからないから、不安が強い。折角お金を出しても、とても味が強くて食べられないことさえある。そのような時には、どうして、このように言葉にちがいができたのだろう——と、言語学ですでに解決しているのか、していないのかわらないようなことを、漠然と考えてしまったりする。今度はK君といっしょだからそのような不自由はなく、パリーの滞在を楽しめそうであった。

K君の運転する自動車で、予め頼んでもらっていたサンジェルマン通りの大ホテル・リマの前につく。大ホテルとはいうものの、部屋数が二〇ぐらいの小さなものである。ここには、すでに二回も泊っていたから、今回は三度目になる。右隣りはカフェであり、左隣りは床屋である。その間の小さな入口から階段をのぼり、そこに事務所があって、部屋の鍵を渡される。その主は、前の時と同じおじさん。私には、懐しさがこみあげてくる。前回の時に、日本にいったみたいだが、どのシーズンがよいかなどとき

いていたおやじである。

そこで、私は顔を差し出すようにして、「去年もおとしもここに泊った」といったが、あまり反応がない。あまり懐しそうにしなかったのである。それは、一体、どういうわけなのであるか？ 同じような思いは、ヨーロッパの旅の間に、しばしば味わったものである。恐らく、たくさんの来客のために、一々おぼえてはられないのであろう。ヨーロッパにはそういうところがある。わが国でも、次第に同じような傾向が生じている。近代化とともに、旅の情けは次第にうすれてくるものであろうか？ 今はそれを問わない。小さな落ちついた部屋の住人となり、窓からサンジェルマン通りを見おろしてみる。前は、黒々とした教会。それから四、五軒左手に、アスパラガスのうまいレストランがある。この前に来た時に、——それは四月の終りであったのだが、大きなお皿に盛られたアスパラガスに舌鼓を打ったのを思い出す。愛想のよいおばさんがいた。今度も、一回はそこで食事をしてみようか——などと思う。

今回のパリー滞在の第一の目的は、サルベトリエル病院の、精神科の児童部を訪問することであった。この児童部は、ヨーロッ

バでも名高く、児童精神医学の大御所であるミシヨウ教授がいる。この児童部からの研究業績は、非常に数が多く、すぐれたものとされている。

しかし、私には不愉快な思い出がある。それは十五年前のことになるが、ここを訪れた時に、大きな失望を感じたのであった。

それは、種々の障害のある種々の年齢の子どもをただごったに收容しているという感じで、がらんとした部屋には玩具などもなく、所在のないという顔付きをした子どもたちが、右往左往していた。私が部屋に入っていくと、親しそうに寄ってくる子どももいたが、ただ寄ってくるといった子どもも多く、全く子どものことを考えていないことがわかった。一、二の感心する部屋があり、特に行動観察の部屋には、子どもがどこにいてもその音声をキャッチできるような装置がしてあったのは、その当時としてはかなり新しいものであった。

その後、何回かバリーを訪れたのであるが、サルベトリエールにはすっかり魅力を失っていたので、特に見学しようという気持も起きなかった。しかし、いくつかの学会や学術雑誌には、この児童部からの報告として、自閉症児の研究が発表されていたので、十数年の昔とは打ってかわって、新しい状態が見られるので

はないかと予想したのである。特に自閉症児に対して、どのような治療教育的なアプローチがなされているかを知っておきたかった。自閉症児のみでなく、いろいろと問題を持っている子どもの研究には、必ず治療教育的なアプローチがいかになされたかが問題にされなければならないと、私は考えている。本当に子どもをよくしようという熱意をもって子どもに接近してはじめて、子どもの本質に触れることができるし、その上での研究であることが絶対条件であるとも考えている。今回は、K君が通訳の労をとってくれるというので、大いにディスカッションをする楽しみもあった。

病院についてしばらく待たされた後に、医局長の部屋に通された。彼は英語が話せるというので、早速、訪問の主旨を述べた。

それに対して、彼はどのように答えたか? 「ここでは治療教育的なアプローチはしていない。三週間から二ヵ月ぐらいかかって観察や検査を行ない、診断が確立したら、施設へ送るのです。施設の名簿が完備していて……」といいながら、机のうしろの本棚から部厚いリストの帳簿を取り出して私に示しながら「このように、どの区にはどのような施設があるかが一目でわかるから、その子どもの家の近くの施設へ紹介するのです」と説明した。

私は「子どもの診断に当たっては、治療教育的接近が極めて重要と思うけれども、その点についてあなたはどう思いますか」と質問を重ねた。しかし、それに対する回答は、「ここではそれをしていない」というのみであった。私は、「それでは、自閉症の本質はおわかりにならないのではないか」という言葉を浴びせようと思ったが、失礼に当たることを考えて、口をつぐんでしまったのである。

若い医師が案内役になってくれる。ドイツ人とはちがい、非常に明るく、ユーモアが飛び出す。

しかし、子どもたちが収容されているいくつかの病室は、昔ながらであった。幼児の集められている最初の病棟では、よちよち歩きの子どもが二三人いて、私どもの方へと歩いてきたが、そのまま素通りしていった。その部屋には、ほとんど玩具やそれらしいものも置いてなかった。粗末なベンチが一つ二つおいてあるだけで、うす緑の壁もところどころがはげていた。いったい、子どもたちは誰と何をもってどのような遊びをしているのであろうか？

三歳ぐらいの子どもがベンチの上に立った時に、つかつかと寄っていった中年の看護婦が、その子どもの肩のところをつまみ上

げて床の上におろしたのを見て、私は質問をする勇気を失ってしまった。

小学生や思春期の子どものいる部屋も次々とみせてもらったが、何のデザインもなく、ベッドが何列かに並び、その間に子どもたちが何人かたむろして、私の方をじろじろと眺めていた。

窓外から、中庭がみえる。二人の男の子がそこにいたが、全く遊具が置いてないので、小さなボールを蹴っていた。

私は、次第に腹が立ってきた。あそびが中心の子どもの世界に、何一つ玩具や遊具がおかれていないし、遊びの指導も行なわれていないのである。このような病院にいれば、普通の子どもでもいろいろな症状や問題行動が現われてくるであろう。それを、われわれはホスピタリズムと呼んでいる。まして、いろいろと障害のある子どもでは、いっそうその障害を悪くする可能性もある。それを観察しているのであったら、また何をかいわんや——である。

かわいそうな子どもたち——この子どもたちをどのように救ってあげたらよいであろうか——そのようなことを考えながら、早に引き上げたのである。